

宇文 藤玥

YUWEN Tengyue



四時歌/殘骸

銅版画、雁皮刷り、製本/銅版画、雁皮刷り

四時歌/残骸

命の力は小さな生物の中に宿る。植物と花は、自らの生存環境や生命活動において極めて小さな要素として、無視できないほどの命を宿している。この力は必ずしも目立つものではなく、命のあらゆる隅に潜んでおり、骨の一本一本、葉っぱ一枚、花一輪にも浸透している。

かつて私は、暗闇の中に住んでいたかのように、果てしない夜の中を彷徨っていた。骨は一本ずつ折れ、親の口論や叱責、暴行は私をますます弱くし苦痛を感じていた。しかし、新しい骨は未来と夢を求めるたびに根を張り、肉体を破って成長していた。このような命の力は、やさしい瞬間には生まれず、むしろ暗闇の中で光を見つけようとする勇気から生まれている。

私が世界に示したいのは自分の強さと力だ。感情と脆弱さを隠し続け、自己防衛をしている。しかし、隠すほど気になり、缶の中である限界までたまると瞬間的に爆発する。その時、私は生命の真の力を理解した。生命の力は完璧さではなく、自分の脆弱さや小ささを理解し、それでもなお立ち向かい、弱点を抱えて運命と闘うことにある。歯車との摩擦ごとに、生命は一つの炎となる、心の中に勇気を灯す炎だ。

私が伝えたいこと、描きたいこと、語りたい物語は、これまでの命の力の具現だ。それらは単なる生存の理由だけでなく、私を支えるものであり、私の骨なのだ。

私の修了作品「四時歌」では、日本と中国の月ごとの代表的な花を探求している。花の命は脆く儂いが、それでも頑強な生命力を見せる。どんな環境でも花は咲き、命を維持するために努力している。明るく温かい時もあり、寒風が鋭く吹く時もある、四季の変遷を通して、私の人生の経過も表現されており、「四時歌」は私の人生を歌っている。

花の中の強大な力は、まるで花を支える骨のようだ。私は人間や動物の骨を観察し、植物の成長パターンと葉脈の相似点を見つけ、花びらが持つ骨を描き出していた。

硬い骨が持つ特性と、花びらの傷つきやすい柔らかさとの対比が際立っている。花の生命は短く儂いものの、骨は数百万、数十億年まで永遠に残っていた。この留存の違いが生命の膨大なエネルギーを生み出している。短い開花であろうと、長く流れていこうも、地球に痕跡を残す。同様に銅版画の制作も、運搬や制作プロセスでの傷、秒単位から数時間にわたる腐食など、銅版の柔らかい表面には無視できない痕跡が残る。これらの傷と記録はすべて、一つのテーマを指し示している——「命の力」。